

## 「安息日の主」

マルコの福音書 2:25～28

### はじめに

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:23 ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた。

2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。」

前回に引き続き、この箇所はイエシュアとパリサイ人たちとの間でなされる「安息日」という日についての問答を記した箇所です。ヘブル語でシャバット(שַׁבָּת)と呼ばれるこの日は本来、創世記 1～2 章に記された、神の天地創造の御業の完成を指し示すものです。

【新改訳 2017】

創世記

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

神は「なさっていたわざを完成」させ、そして「すべてのわざをやめられた。」とあります。ここに使われている「休む、やめる」という意味の動詞シャーフアト(שָׁפַט)にこの「安息日」シャバットは由来しています。このように「安息日」とは神の御業、ご計画の「完成」を指し示す日であると言えます。

前回のメッセージで、「弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた」という記述には、イスラエルの子孫によって地上のすべての民族は祝福され、神の国において、神の命令に聞き従いつつ、思いのままに生きるというようなメッセージが「型」、たとえとして表されていると考えられることを述べました。

神は、イエシュアに安息日に麦畑を通らせ、そしてその弟子たちに麦の穂を摘ませることで神のご計画の完成である神の国の「型」を表しておられたのです。しかしこの行為が「型」であり、たとえとしてのその意味を理解できないパリサイ人たちはその行為を非難しました。なぜなら律法によれば、弟子たちの行為は労働にあたり、安息日には仕事をしてはならないという律法に違反したことになるからです。

【新改訳 2017】

出エジプト記

20:8 **安息日**を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、【主】の安息日である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

20:11 それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は**安息日**を祝福し、これを聖なるものとした。

ここに記されているように、パリサイ人たちは「あなたはいかなる仕事もしてはならない。」という部分を強調し、この安息日をただ単に働いてはならない日として捉え、そしてこの安息日を含めた律法全体を、禁止と命令の事項としてしか理解していませんでした。しかし神は律法をご自身の計画を指し示すものとしてイスラエルにお与えになったのです。そしてその完成を指し示し、人にそれを覚えさせ、待ち望ませることを目的として、本来律法は、「**安息日**」は与えられたのです。そこでイエシュアはダビデが行ったことをたとえとして、この「**安息日**」について述べ始められます。それが今日の箇所です。

## 1. 飢える

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:25 イエスは言われた。「ダビデと供の者たちが食べ物なくて空腹になったとき、ダビデが何をしたか、読んだことがないのですか。」

イエシュアが引用して言われたこの出来事は、以下の I サムエル記 21 章に記されているものです。

【新改訳 2017】

I サムエル記

21:1 ダビデはノブの祭司アヒメレク（エブヤタルの父）のところに来た。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて言った。「なぜ、お一人で、だれもお供がないのですか。」

21:2 ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、あることを命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じたことについては、何も人に知らせてはならない』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。」

21:3 今、お手もとに何かあったら、パン五つでも、ある物を下さい。」

21:4 祭司はダビデに答えて言った。「手もとには、普通のパンはありません。ですが、もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら、聖別されたパンはあります。」

21:5 ダビデは祭司に答えて言った。「実際、私が以前戦いに出て行ったときと同じように、女たちは私たちから遠ざけられています。若い者たちのからだは聖別されています。普通の旅でもそうですから、まして今日、彼らのからだは聖別されています。」

21:6 祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、温かいパンと置き換えるために、その日【主】の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである。

イエシュアはこの出来事を引用して語られたと考えられますが、ここに「ダビデと供の者たちが食べ物もなく空腹になった」ことを前提として示されました。イエシュアはご自分と弟子たちを「ダビデと供の者たち」にたとえられたと考えられます。そしてここにヘブル語で「飢える」という意味の動詞ラーエーヴ(לָאֵב)が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

41:53 エジプトの地での豊作の七年が終わると、

41:54 ヨセフが言ったとおり、七年の飢饉が始まった。その飢饉はすべての国々に臨んだが、エジプト全土には食物があった。

41:55 やがて、エジプト全土が飢えると、その民はファラオに食物を求めて叫んだ。ファラオは全エジプトに言った。「ヨセフのもとに行き、ヨセフの言うとおりにせよ。」

41:56 飢饉は地の全面に及んだ。

これはかつてこの世界全体「すべての国々」「地の全面」に及ぶほどの大飢饉<sup>だいききん</sup>があったことを記したものです。ここで「飢える」と訳されているのが聖書で最初のラーエーヴです。この大飢饉を事前に神から知らされていたヨセフはエジプトの宰相<sup>さいしやう</sup>となってこれに備えていたため、ファラオはすべての民に「ヨセフのもとに行き、ヨセフの言うとおりにせよ。」と言いました。このヨセフとはアブラハムの子イサクの子ヤコブ（イスラエル）の長子となったヨセフです。つまりラーエーヴとは本来、アブラハムの子孫、イスラエルの民のもとに集まり、これに従うことを指し示していると考えられます。このようにイエシュアは「ダビデと供の者たちが食べ物もなく空腹になった」ことを「型」として、神のご計画の完成である神の国とは、イエシュアとイエシュアに従う者たちの国であると同時に、イスラエルの民、ユダヤ人を中心として、すべての国々の民がこれに従う世界であることを表していると考えられます。

## 2. 臨在のパン

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:26 大祭司エブヤタルのころ、どのようにして、ダビデが神の家に入り、祭司以外の人が食べてはならない臨在のパンを食べて、一緒にいた人たちにも与えたか、読んだことがないのですか。

Iサムエル記 21 章にあるように、イエシュアはエブヤタルの父アヒメレクがダビデに聖別されたパン「臨在のパン」を与えたことを述べられました。このパンは神の命令によって神殿（幕屋）の聖所に供えられたパンであり、毎週安息日ごとに新しいパンと取り換えられていたことがレビ記 24:8 に記さ

れています。ダビデがこのパンを受け取ったその日は、安息日であったということがその引用箇所から理解できます。イエシュアはこの出来事を引用し、ご自分をダビデにたとえて、安息日とはご自分に従う人々が「臨在のパン」を食べることを指し示して述べられたと考えられます。つまりイエシュアに従う者は神の「祭司」のように聖別され、その「臨在の」中に招き入れられること、すなわち神の国に入れられるということを示し、それが安息日に指し示された神のご計画の完成であることが、ここに述べられていると考えられます。また「ダビデが神の家に入り」とイエシュアが語られたことにも、まさにそれが表されていると考えられます。

ちなみにこの「パン」のことをヘブル語でレヘム(לֶחֶם)と言いますが、その最初の言及が創世記 3:19 にあります。

【新改訳 2017】

創世記

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

これはエデンの園でアダムとエバが罪を犯した後、神が彼らに語られた御言葉ですが、ここで「糧」と訳されているのが聖書で最初のレヘムです。「大地に帰る」その時まで、人は苦しみながら「糧」レヘムを得ることが示されています。つまりレヘムとは本来、「大地に帰る」こと、すなわち「取られた」場所に帰ることを指し示していると考えられます。天と地とその中のすべてのものは神によって創造されました。ですからレヘムとは本来、苦しみから解放され、神のみもとに帰る、神とともにいることを指し示した言葉であると考えられます。

### 3. エブヤタル

またイエシュアはダビデについての記述を引用された際、彼にパンを与えた祭司の名を実際には「アヒメレク(אֲחִימֶלֶךְ)」(「王は兄弟である」という意味)であったにもかかわらず、ご自分が語られた時にはその息子であった「エブヤタル(אֲבִיטָר)」(「父は残される」という意味)の名が使われました。これはその名の中に「父」を意味するアーヴ(אָב)と、「残される」という意味の動詞ヤータル(יָטַר)があり、この本来の指し示す意味がヤコブ(イスラエル)が飼う羊とやぎの群れを指し示しているためだと考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

30:35 ラバンはその日、縞毛と斑毛の雄やぎと、ぶち毛と斑毛の雌やぎのすべて、すなわち身に白いところのあるもののすべて、それに、黒毛の子羊のすべてを取りのけて、息子たちの手に渡した。

30:36 そして、自分とヤコブの間に三日分の距離をおいた。ヤコブはラバンの残りの群れを飼った。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ（イスラエル）が、伯父のラバンの家に仕えていた時の話ですが、ラバンの羊とやぎの群れから、白以外の色のついたものが取り除かれ、白いもの（ラバンは人名ですが「白い」という意味がある）だけとなった「ラバンの残りの群れ」をヤコブが飼ったという箇所には、聖書で最初のヤータルがあります。聖書で白は聖さ、聖なるものを表す色です。ですからエブヤタルという名には、父なる神は聖なるものとそうでないものを分けられ、聖なるものだけを残し、これをイスラエルに養わせ、導かせるというような意味が表されていると考えられます。イエシュアはこのご計画を表すために、あえてアヒメレクではなく、その息子であるエブヤタルの名が使われたと考えられます。

このようにイエシュアは「安息日」について、神のご計画の完成である神の国を指し示すものとして述べられました。しかしパリサイ人たちはこれを「あなたはいかなる仕事もしてはならない。」という禁止と命令の事項と捉えていたために、イエシュアの御言葉を理解することができないばかりか、イエシュアを「安息日にはしてはならないことをする」者、すなわち律法に違反する者として裁き、断罪しようとしていました。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」というパリサイ人たちの言葉は、質問というよりも裁判の法廷での尋問、追及、糾弾のようです。まるで権威者のように振る舞う彼らに対して、イエシュアは次のように述べられます。

#### 4. 権威

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:27 そして言われた。「安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたのではありません。」

ここで「設けられた」また「造られた」と訳されているヘブル語は、「与える、渡す、置く」という意味のナータン(נָתַן)という動詞です。

【新改訳 2017】

創世記

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

これは神の天地創造の御業の第四日、一般的には神が太陽と月と星を創造されたと解釈されている記述です。ここで「天の大空に置き」と訳されている箇所には聖書で最初のナータンがあります。そしてそれは地上を「照らさせ」、「治めさせ」また「分ける」ための存在を指し示し、ナータンとは本来、統治や支配、裁きを行う権威を持った存在を指し示した言葉であると考えられます。「安息日」とは神のご計画

の完成である神の国、御国を指し示していることを述べてきました。つまり「安息日は人のために設けられた」とは、神の国とは地の上、また人の上に置かれた、人を治める権威であることを意味した言葉であると考えられます。そして「人が安息日のために造られたのではありません」とは、その神の国の権威者は人ではない、つまり人が神の国の権威者、統治者ではないことが述べられていると考えられます。そして神の国において、その国民を治める、支配する権威を持っておられる御方が誰であるかが次に示されています。

## 5. 主

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:28 ですから、人の子は安息日にも主です。」

「安息日」に指し示された神のご計画の完成である神の国、その御国の「主」である、権威ある御方、それは「人の子」として述べられています。「人の子」とはメシア（キリスト）の別称、すなわちイエシュアご自身を指します。イエシュアが、イエシュアこそが神の国の王の王、主の主であることがここに指し示されていると考えられます。そもそもイエシュアはご自身と弟子たちを、イスラエルの王の象徴である「ダビデと供の者たち」にたとえおられる時点で、権威者としてのご自分の立場を表しておられると考えられます。そしてまたここで「主」と訳されている言葉は、ヘブル語ではアードーン (אֲדֹנָי) ですが、これは本来、サラの「主人」すなわち彼女の夫であるアブラハムを指した言葉です（創世記 18:12）。つまり「人の子は安息日にも主です。」という御言葉の中には、メシアであるイエシュアとアブラハムの子孫であるイスラエルの民がともにあり、ともに神の国を治めるということが表されていると考えられます。

このように「安息日」は神のご計画の完成である神の国を指し示し、これに目を留め、信じ、待ち望む、慕い求めることを目的とするものであると考えられます。ですからたとえ週に一度休みの日を設けても、またユダヤ人たちのように詳細な規定によって一切の労働行為を禁じても、そこに神の国を見出していなければ、求めがなければ、その行いは無意味なものになってしまうばかりか、束縛、呪いにさえなりかねません。この安息日だけにとどまらず、聖書は禁止と命令の事項を記した書物ではなく、神のご計画とその完成を指し示した、神を信じる者にとってそれは良い知らせ、福音です。聖書全体をそのような書物として捉えつつ、ますますこれに学び、神のご計画の完成を待ち望んでまいりましょう。御国が来ますように。